



妙たえの光ひかり

復刊122号

母の死を期にお寺へ

新潟市西蒲区巻
廣野綾花さん(38歳)

綾花さんはひとり娘である。車好きの父の誘いで、休日にはよくドライブする仲の良い3人家族だった。乳がんを患っていた母親の美千子さんは、自身の兄が埋葬された「安穩廟」へ墓参りする度に、夫と娘を遺して逝くことになるかも知れない不安を現院首に相談していた。

そして5年前の3月、美千子さんは58歳で亡くなられた。最後の入院のとき、枕元の綾花さんに預金通帳と生命保険証書の保管場所を教え、家事を託して「お父さんを頼むね」と言った。そして「お葬式は妙光寺、お墓も「安穩廟」にしてほしい。親族友人の通知先は携帯電話のメールアドレスにあるからね」と言い遺したのだった。

このとき綾花さんは32歳。「あのころ親を亡くした同級生が他に2人いたんです。やはり数え年33歳の厄年なのかな、って思いましたね」と振り返る。早すぎる別れの後に、父とひとり娘が遺された。(2ページに続く)



行事案内



がっきおさ

ふだくば

月忌納め(お札配り)

12月中に地元の檀徒宅へ、来年のお札を持ってお経に伺います。県外の方でお札を希望される方にはお送りします。

た

除夜の鐘・お焚き上げ

12月31日(土)

午後10時30分から、本堂で除夜法要。11時45分ごろから除夜の鐘、古いお札、しめ縄等のお焚き上げ、があります。除夜の鐘はどなたでも撞いていただけますが、先に大玄関受付で整理券を配布します。ご家族そろってお参り下さい。

※お焚き上げの古いお札等、当日お持ちになれない方は、事前に祖師堂の受付箱にお入れください。



年始参り

1月1日(日)、2日(月)

午前9時～午後4時。玄関での受付後、住職が大広間でお待ちしています。令和5年に年回忌を迎えるお宅は、法事の申込みをお受けします。感染症対策のため、おせちの振舞いは昨年同様自粛させていただきますが、お参りの人数制限はありません。ご家族そろっておいでください。元旦のお茶席は実施の予定です。



ほしまつ

きがんふだ

『星祭り』祈願札

人には個々にその年の星回りがあります。新年の星回りが安泰でありますようにと祈願するのが『星祭り』です。ご希望の方にはご家庭で1枚のお札にして1軒2千円でお届けしています。新規お申し込みの方は、別紙申込書にご家族の氏名、性別、生年月日を書いてお知らせ下さい。継続の方は申込不要ですが、慶弔等でご家族に変更があった場合はお知らせください。新規、変更ともに12月20日までにお願ひ致します。

厄除け祈願祭

2月4日(土)、5日(日) ※両日とも11時から

厄年の早見表は別紙チラシにあります。厄年以外の方でも「家内安全」「合格祈願」等お受けいたします。同封の返信用ハガキにてお申込みください。



月例信行会とボランティア

1、2月の信行会とボランティアはお休みで、3月から再開の予定です。

3月5日(日)「信行会」、3月15日(土)「ボランティア」です。



※新型コロナウイルス感染拡大状況によっては、すべての行事において内容を変更する場合があります。ご了承ください。

あとがき

越後平野のあちこちで、白鳥の群れが餌をついばむ姿を見かける季節になりました。冬らしい冷たい空気は、心を引き締めてくれます。コロナ禍も丸3年となり、ウクライナでは戦火が続いています。いろいろなことが曲がり角を迎えるように思える今冬です。来年はいいことがありますように。(新倉理恵子)

新潟市西蒲区巻 廣野綾花さん

毎週墓参りする父

「それまで母に任せきりで何もしてこなかった父が、2人になってからは料理をはじめ家事のほとんどをやってくれます。私のことを心配してくれているんだと思います。それに父は毎週末に母のお墓参りをするんです。そして母と伯父の月命日には、平日なら仕事の昼休みにするので、毎月5〜6回はお墓参りしています。その度ごとにお花を供えたお墓の写メを撮って、私に送ってくるんです」

母の兄——彩花さんの伯父は離婚して子供がなく、大病して退院後ひとり暮らしだった。身体に麻痺も残っていて、綾花さん家族が家に引き取り、皆で看病して最期を看取った。母より若い56歳の死だった。その時県外に住む母の姉と一緒にいるからと、「安穩廟」を契約したのが妙光寺とのご縁の始まりである。

「以前よく行った家族でのドライブも、今は2人です。3人でたび

たび訪れた思い出の場所や、美味しかったお店を巡るんです。初詣には明治神宮や浅草寺にまで足を伸ばし、日蓮宗大本山の池上本門寺にもお参りしました。」

送り盆スタッフとお茶クラブ

綾花さんは良恵住職と同じ高校で、同学年だった。クラスが違ったので直接話したことはなかったという。これを知った現院首が7日毎のお経で訪ねた際、夏の送り盆行事のお手伝いをお願いして、ほぼ毎月のスタッフ会議に参加するようになった。

また妙光寺には有志による「お茶クラブ」がある。安穩檀徒で元裏千家新潟県支部長の小川さんを中心に稽古を続け、正月等行事のたびにお参りの皆さんにお抹茶を振る舞い喜ばれている。綾花さんも若い後継者として早速誘われて、今では練習だけでなく、お茶会でお手前が出来るほどになった。

「お寺を内側から見ても、20代から70代までこんなに幅広い世代の普段接することのない職業の人が

集まって、催しを作っていることに驚きました。飲み会等でも色々お話が聞けて、すごく新鮮でたまりませんでした。お茶を始めてからは何人もの皆さんから着物を沢山いただき、本当にありがたいです」と語る。

「二週間仕事ばかりしていると、やはりストレスもたまります。そんなときに、会議、お茶のお稽古でお寺に来て、皆さんとお話が出来ると、心がリフレッシュされてリセットする感じです」

ずっと関わっていききたい

綾花さんは、大きな総合病院で医療事務の仕事に従事している。だから新型コロナウイルスへの注意も厳しく、こしばらくは集まりへの参加も自粛している。

「母との別れという悲しいことがきっかけで、お寺の催しに関わらせていただきました。そこで、皆さんもそれぞれに色んな思いで生きておられるんだあとと知りました。それに良恵さんは自分と同年齢なのに、住職という重圧の中でとて



も頑張っていると思う。今、コロナ禍での制約がありますが、落ち着いたらぜひまたお手伝いさせていただきます」

「いま一番心配してくれる父に、できることなら結婚して孫の顔を見せて上げたいですね。母には十分に出来なかったんで、父にはなんとしても喜んでもらいたいです」と、にこやかに語ってくれた。

(院首記)

妙光寺では、行事の企画運営、準備作業等のお手伝いできるスタッフを随時募集しています。気軽に問い合わせてください。

安 穩

小川良恵

いまだわきまへがたく候ふ

境内も冬へ

境内の紅葉も色づきを深めて参りました。今号の『妙の光』がお手元に届くころには、季節は冬へと移り変わっているでしょうか。先日、お盆を終えたばかりのような気持ちでありましたが、1年という時の流れの速さに、年々驚いています。

母が思い出されて
じんわり

先日、開催中の写真展のご縁があり、中学時代の先生が訪ねて来て下さいました。卒業して20年以上も経つというのに、私以上に当時のことを覚えておられ、相手にしてみれば、3年に一度入れ替わる学生のことなのに……驚くと同時にとても有難く思いました。母のことも新聞広告で知り、同僚の先生方と「明るくて楽しいお母様だったのに残念だ」と思ってくれたそうです。話している間に、当時の母の様子が思い出されて、私もじんわりとしてしまいました。

他者の言葉を通して、
哀しみを分かち合う

私達がお読みしている『法華経』

は一番はじめに「如是我聞」という言葉からはじまります。「私はこのように聞いた」という意味です。書物であるお経は、仏様の教えをまとめたものですが、お釈迦様ご自身が筆をとって書かれたものではありません。釈尊の入滅後、直接教えを受けた弟子たちは、集まって会議を開きました。そこで、生前お釈迦様がどんなことを語られていたのか、どんな教えを説かれていたのかを共有し、後々の世に正確に残し伝えていくため、記録として残したものが、私達がお読みしているお経です。だからこそ、今私たちは、生きていたところのお釈迦様の言葉を、お経を通して聞くことが出来るのです。

集まった弟子たちにとって、この会議は同時に哀しみを分かち合う場であつたのだらうと想像が出来ます。

これまで通夜と最後の振舞いの席というのは、故人と縁のあつた方々に集まってもらい、生前の姿や思い出話を共有し、哀しみを分かち合う意味がありました。西蒲区周辺の通夜では、親族以外にも近所の方々などが大勢弔問に訪れ、振舞いの席も非常に賑やかなものでした。確かにご遺族の負担は大きくなりますが、他者の言葉を通して故人の面影には、

離別の苦しみを和らげる効果が確かにあり、前へ進む力になるのでしょう。この振舞いの飲食は、最近ではコロナ禍でほとんど無くなつてしまいました。みなさんの哀しみはどうなっているのか、と気になります。

日蓮聖人の言葉

さて、私たちの開祖、日蓮聖人は筆まめな方で、仏教各宗派の開祖のなかでも一番多く、信者に宛てたお手紙が残されており、そんな中、息子を亡くした母親に対しては、「人はいづかならず死ぬものであると、普段から皆さんに説いている身ではありませんが……」と前置きをした上で、「時にあたりてゆめかまぼろしか、いまだわきまへがたく候ふ」(実際に、ご子息のご逝去に直面してみると、夢ではないか、幻ではないかと、気が動転してしまっています)と綴られたただただ自分も同じ悲しみを抱いていることをお伝えになつています。

昨今の状況では通夜や葬儀の形も以前と同じように、とはいきませんが、家族だけではなく周囲の人々が故人を偲べる機会、遺族をいたわる場を大切にする社会であつて欲しいと願います。

◆石山与五栄門写真展 10月8日～11月13日

昭和30、40年代の西蒲原を撮影した石山与五栄門さんの写真展。3会場のひとつになり、期間中約1000名が来場しました。1万6千500点に及ぶ貴重な写真を、新潟大学アーカイブが保存したことを記念したもので、妙光寺に関わる写真も展示されました。10月30日には石山さんと親交のあった院首も登壇してギャラリートークを開催し、定員超過の60名で熱気にあふれました。



◆お会式・法号授与式 11月6日㊥

日蓮聖人滅後741年のお会式法要と、併せて例年の生前法号（戒名）授与式を営みました。今年は宮城、神奈川、長野県を含む9名の方が生前法号を希望され、数珠の持ち方他の研修後、お会式参列者の前で授与されました。



◆秋奉加

今年も農家の檀徒さん方から新米の奉納をいただき、お会式にお供えしました。ありがとうございます。



◆位牌檀を増設しました

永代経を依頼される方の増加で、お預かりして安置する位牌堂が手狭になり隣の祖師堂に増設しました。1年間1万2千円、30年以上30万円からです。どなたでもお申し込み頂けます。



◆安穏廟増設に伴う周辺整備

『池の上安穏廟』増設準備の周辺整備工事が年内の分を終えました。



寺のうごき



◆古墳まつり 9月24日㊥

新潟日報社主催の『角田浜妙光寺山古墳まつり』に協賛しました。当日は盛況で、参加者200名以上となりました。子どもたちによる発掘、火起こし、勾玉作り等の体験コーナーが大人気。橋本新潟大学名誉教授の指導による古墳の模擬埋葬儀式も、地域の人たちが古代人に扮して盛り上がりしました。



◆身延山・七面山団体参拝 9月25～27日



コロナで休止が続いたせいか希望者が少なく実施が危ぶまれましたが、総勢18名の参加がありました。当日朝に簡易検査をするなど、感染症対策にも十分配慮。2泊3日は晴天にも恵まれ、七面山奥の院に泊まり富士山から登るご来光も見事でした。



◆秋のお彼岸法要 9月23日㊥

生憎の天候でしたが、いつもより参拝者も多く、墓地と本堂での法要を営みました。コロナ対策で、おときは今回も手作りのお弁当でしたが、「とても美味しかった」との声に当番の方たちも喜びました。



第9回 浄土講座

取材の現場から——終活事情の裏表——

最初の終活専門季刊誌として2013年7月に発刊されました。

そして今年春、9年間の歴史に幕を閉じて休刊しました。

日本の終活は、どう変化してきたのでしょうか。

11月6日の浄土講座では、

一つの時代を画した雑誌の編集現場から見た日本の終活事情を

元編集長・赤堀さんにうかがいました。

『ソナエ』編集長になるまで

私は1991年に産経新聞に入社し、社会部記者としてずっと事件や事故の記事を書いてきました。1995年から夕刊の宗教面も同時に担当することになって、そこで寺院や葬儀社などの業界の方たちとお付き合いが始まりました。同時にオウム真理教事件の裁判を長く取材し、それから東日本震災も取材しました。人の死や宗教を取材することが多かったわけです。

震災1周年に際して、新規事業を立ち上げることになったのは、ちょうど「終活」と

いう言葉が話題になり始めた時期でした。そこで宗教界や葬儀業界の方々にも、「絆」「供養」を紹介するなら応援するといつていただき、「終活」雑誌を創刊することになりました。タイトルの「ソナエ」は、「お供え物」と「人生の終わりにそなえる」という意味をかけて名付けました。

雑誌発行から見た「終活ブーム」の背景

◆「ソナエ」はどんな雑誌だったのか

年4回の定期で出していました。今は、どこで何冊売れたのが即日でわかります。泣くほど売れないのは、四国・金沢・広島そ

表紙のタレントさん取材から見えてきたこと

表紙は売れ行きを左右します。第1号は壇蜜さんでした。彼女は大学を出てから葬儀の専門学校に行つてエンバマー（遺体衛生保全士）の資格を持っていると聞き、出てもらいました。当時33歳でしたが、知人の死をきっかけに自分の最期を考えるようになったそうです。そしてすべて整えてから「柄杓を置くように死にたい」と話してくれたのが印象的でした。「人の最期を看取る、看取りスト」になりたい。いかに逝く人を安心させ、自分も安心するかということに関心がある」と言っていました。

第28号の佐藤浩市さんも、良いインタビューになりました。2013年にお父様の三國連太郎さんが亡くなりました。三國さんは「戒名はいらない。散骨してくれ」と言っていました。でも佐藤さんは、「佐藤家之墓」に納骨し、戒名もつけ仏壇で供養しています。七回忌の準備では、三國さんの映画をすべて見て、誰にスピーチしてもらうか「生懸命に考えたそうです。「遺された者としては散骨なんてとてもできない。親父は勝手に生きてきたんだから、最後は俺に任せてほしい」と言っていました。いわゆる「2人称の死」（非常に親しい人の死）の意味を感じさせる言葉でした。「1人称の死」（自分の死）の時は、「散骨」などと言うけれど、「2人称」になると違ってくるのです。

「終活」は縁づくり

私は「終活」とはお墓を探すことではなく、どこに自分の最期を託すのかを考える作業だと考えています。家族、親族——あるいはNPOや弁護士、税理士、自治体——といった人との縁づくり、縁の再構築が「終活」です。その意味では、妙光寺と縁を結んだみなさんはもう「終活」は終わつていて、あとは残りの人生を楽しく過ごせばいいわけです。

私が危惧していること

◆行きすぎる商業主義——

行きすぎる簡素、シンプルの流れ

年末が近づきました。最近ではコロナもあって、年賀欠礼葉書で亡くなったと知ることが増え、辛い思いをすることがあります。葬儀の意義のひとつはみんなが「死」を受け入れて立ち直る点にあると思います。しかし葬儀の現状は、できるだけ少人数で、値段を下げるのがいいことだということになっています。安く簡素にという流れが行きすぎていると思います。

◆宗教の領域を営利目的の業者が乗っ取る

本来の葬儀は、宗教の領域でした。しかし近頃は金融機関までもがエンディングノートを作っています。それから私鉄沿線では、鉄道会社が葬儀ホールを建てる例もありま



赤堀正卓さん
『終活読本 ソナエ』元編集長。現在は(株)産経新聞出版専務取締役。

最後に「死をタブー視しない」時代になりました。実は創刊1周年で、抽選で1名に棺桶を贈る、プレゼント企画をやりました。業界の方からは「死を茶化しているとパッシングを受けますよ」と止められました。ところが大好評で、100通くらいの応募がありました。クレームは1件もありません。当選した方は、居間に棺桶を置いて和服を入れていました。まさに「生」と「死」がひと続きになっていました。2周年では「骨壺プレゼント」をやりましたが、これも好評でした。つまり「死」を明るくとらえる時代になっていたのです。

◆ではなぜ休刊に？

『ソナエ』自体は二貫して黒字でしたが、理論だけでなく実践編も引き受けていかなくてはという思いがあつて、「お墓も葬儀も『ソナエ』の産経新聞に相談してください」という、終活ワンストップの事業にしたいと考えていました。でも新聞社は、今経営が大変です。事業はとても無理だということと、そろそろ潮時かと『ソナエ』は休刊することになりました。



す。郵便局、ガス、電気とあらゆる業者が参入しています。どの会社も「志は高く利益は低く」ならいいのですが、普通は「利益は高く、志は低い」例が多いのです。

◆葬儀の領域をITベンチャーが乗っ取る

その中で、最近目立つのはITベンチャー企業です。「小さなお葬式」などがそれで、葬儀業者と葬儀をしたい人をインターネット上でつないで、手数料を取っています。私の経験ではITベンチャーの人は、白いTシャツに上着を着て、靴がとがついていますね。従来の葬儀社は、どんな時でもネクタイスーツ



姿です。姿勢が違います。IT系の葬儀社の人に人形供養の話をしたら、「何でそんな面倒くさいことするんですかあ？」と言われて愕然としたことがあります。しかもIT系は人が2、3年で入れ替わってしまします。そんな状態で葬儀のことがわかるのだろうか、と思います。

◆いま、東京の火葬場で起っていること
東京23区では公営の火葬場は2カ所しかありません。他はすべて営利を目的とした民営で、大部分が同じ会社という独占状態です。最近、1体の火葬料は7万円超にまで値上げされ、さらに燃料代高騰を理由に追加料金が徴収されています。しかもその親会社の株式が、今後死亡人口が増えるから火葬場は儲かるという理由で、投資の対象になっています。村上ファンドや麻生財閥が株を買い集め、現在は中国系資本のラオックスが筆頭株主です。

これからの「終活」のために

やはり私は、宗教者に期待したいと思います。宗教者がしつかりすれば、葬儀もちゃんとするはずですよ。そして、消費感覚ではない「死生観」を、醸成していく必要があります。現状では資本に踊らされた「死生観」に、みんなが振り回されています。そこを何とかしなくてはいけない、というのが9年間、終活雑誌を編集してきて、私が実感していることです。

法華經を弘めることで得られる功德

『随喜功德品第十八』

「随喜」とは、人の善い行いを見て心を動かされ、喜んで随うことを意味します。

転じて、法要などに参列することを「随喜」と表現することもあります。

この『随喜功德品』では、仏様の教えを聞いた衆生が随喜する、つまり心の底から感激し、他の人々にもこの教えを弘めていこうという気持ちを抱くこと、そうして得られる功德について説かれています。

五十展転随喜の功德

ひとつの喩えとして、「五十展転」があります。法華經を聞いた者が周囲の人々に教えを伝える、さらに伝え聞いた者が喜んで教えを信じて、さらに他の人々にも教えを説いたとします。次々に語り伝えられた回数が50回になったとき、50回目に教えを聞くことになった信仰者は、計り知れない功德を得られる。それは、たったひとりで、数え切れないほど数多くの生きとし生ける者に、80年に渡って、自らの持つ財宝を施し、さらには仏法も説いて悟りに導かせた大施主の功德よりも大きいものであるということです。

随分極端な話にも思えます。しかし、皆さんも、人から人へ内容を伝えようとした場合の難しさはご存知でしょう。一般的には50人も人を介した場合、その教えは最初に聞いた人の1割にもならないかもしれません。しかしながら、心から感動して人にも説こうというその行いは50人目になっても、計り知れな

い功德を与えられるという教えを説くことで、自分自身だけではなく、周囲の人々をも喜ばせることの大切さを表しているのでしょう。

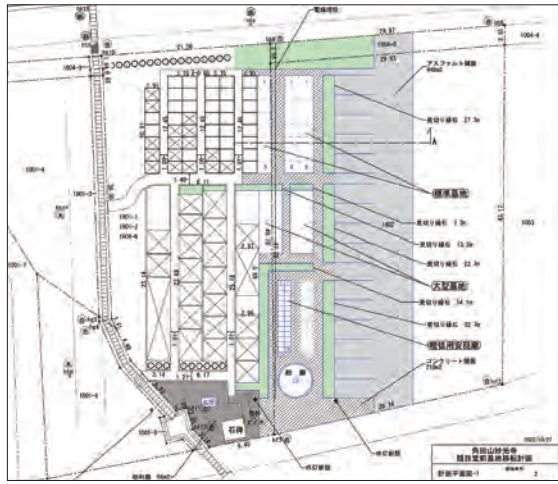
誰もが裕福な美男美女に

随喜功德品では、さらに聞法、つまり教えを聞くことの大切さについても説いています。進んでお寺に行って短い時間でも良いのでお経を聞くこと、お説教の場で後から来た人にも聞くことを勧め、席を譲ること、他人を説法場に誘うこと。この三つを実践すると、来世では、誰もが裕福になり美男美女に生まれ変わるということです。かなりの俗っぽい、現世利益的な教えではありますが、法華經を弘めるための糸口として、必要なことだったのだらうとの研究もあります。子どもに対して「次のテストで良い点を取ったら、好きなものを買ってあげよう」ということにも似ているでしょうか。いかなる手を使っても、教えを弘めて、誰も取り残さずに成仏に導くことが法華經の目的なのです。

山側墓地の移転事業

従来の山側墓地が急傾斜地のため崩落が進み、人命に関わりかねない落石等も起きています。移転希望者も確定して詳細設計図も完成、11月8日総代他6名の役員で個々の新墓地配分先を抽選で決定しました。年内に保健所との事前協議を開始します。着工前には関係の皆様に最終確認のお知らせを予定しています。新たなご希望や不明な点がありましたら、早めにお知らせください。

題目堂墓地移転計画図



『安穩廟』最終増設と周辺整備

増設を重ねた「池の上安穩廟」が、夏前に満杯となりました。更に希望者が途切れず、隣接地に14基112区画を増設するべく準備中です。今回で墓地面積の上限に達するため、最終の増設です。諸物価高騰の影響で工事費も大幅増額のため、やむを得ず1区画90万円に改訂しました。



角田山妙光寺インフォメーション

併せて駐車場を増設して利便性を増し、車椅子での参拝も楽になります。東側には管理用道路のために盛り土をしました。ここからの境内の眺望が抜群です。盛り土の土留め石を業者の寄付で修景し、境内側からの見栄えも考慮しました。同時に将来的な管理の負担が少しでも減るように考えて進めています。

銀杏の不作

例年、大晦日の除夜の鐘を撞いた方全員に、鐘の数を袋に書いた銀杏を差し上げています。本堂前的大イチョウの銀杏を、以前はなぎとさんが、最近では院首が皮をむいているのですが、昨年に続き今年も不作です。今年はパチンコ玉の大きさしかなく皮むきを断念しました。代りの品でご勘弁ください。銀杏の実をたわなに実らせる方法をご存知の方がいらしたらご教示ください。

浄土基金ご協力のお願い

この30年余りの間に消費税も郵便料金も上がりましたが、年会費は据え置いたままです。そのたびに値上げも検討しました



落ち葉掃きに威力発揮の強力ブローアを入れ替えました

が、会員数の増加で対応してきました。ここに来て物価高騰と、折悪しく境内整備に伴う池の給水設備、老朽化による機械備品の入れ替え等が続く浄土基金の目減りが続いています。皆様におかれましても給料は上がりず年金は減額のなかで、年会費の増額もしにくい状況です。そこで浄土基金へのご協力をお願い申し上げる次第です。

『高橋泥舟の扁額』

でいしゅう

『靈宝殿』と書かれたこの扁額は、勝海舟、山岡鉄舟と共に、幕末の三舟と呼ばれる高橋泥舟の書です。本堂正面の中門に掲げてあります。

泥舟は江戸末期、徳川家最後の將軍15代慶喜に、官軍の西郷隆盛への使者として選ばれました。徳川家の処分を免れるための使者でした。しかし主君慶喜に信頼篤い泥舟は江戸を離れられず、代わりに妹の夫の山岡鉄舟を推薦します。鉄舟は初対面の勝海舟を訪ね、その書状を持って西郷隆盛に会い、見事大役を果たしました。その後の西郷・勝による江戸城無血開城の会談は、よく知られるところです。泥舟は槍の名手であり、熱心な法華経信者でした。幕末、越後を経て会津に向かう途次、現在の新潟市西

蒲区曾根の蔵元小林家に逗留して、冬を越しました。その後の明治26年小林家に再泊、妙光寺檀徒であった当主の依頼で書かれたのがこの扁額です。

『靈宝』とは、妙光寺檀徒の五ヶ浜遠藤家の祖先が、日蓮聖人からいただいた印鑑のことです。遠藤家の祖先は鎌倉時代、佐渡配流の日蓮聖人を警護する役人として幕府から派遣されました。赦免されて鎌倉に戻る日蓮聖人から、来世での再会を約してこの印鑑を頂きました。

この印鑑を「ご判様」と呼び、全国各地の日蓮宗信徒は妙光寺で授けられるこの写しを、自らの棺に収めてあの世に旅立つ習わしでした。『靈宝殿』はそれを意味するものです。



2022年5月、喜多村園子著『続小林二郎伝』小学館スクウェア刊で紹介。またこの秋の『石山与五右衛門写真展』でも、往時の『ご判様』行事の賑わいの写真が展示されました。



Q なぜ仏教では亡くなった時の`行年、を数え年にするのですか？

`行年、とは、この世に生まれてからの年数のことです。同義語に`享年、がありますが、こちらは天から授かった寿命を表します。どちらも、生まれた時を1歳として、正月を迎えたタイミングで歳を取ります。

`行年、を「この世で修行した年数のこと」と意味付けする場合がありますが、もともと`行年、は仏教用語ではありませんでした。昔の庶民には、個人の誕生日を祝う習慣がなく、一斉に年を加算する数え年のほうが馴染み深かったのでしょう。

また、仏教が満年齢ではなく数え年を採用するのは、お母さんのお腹に宿った瞬間から命であるという、考え方もあります。所謂十月十日、無事に生まれるまでの成長時間も大切にするので、生まれた赤ちゃんは1歳なのです。仏教の命との向き合い方が顕れています。